みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4579

4　子ヒツジをわすれない母ヒツジ

第四日め（三月十九日）

まだはっきりと覚醒しない。ふとんのなかでグズグズしている。

モージ母がさっそく寝床を出ていく。枕元においてある腕時計をみると、午前三時。なんと早い起床だろうか。それにしても、こんなに早くてなぜ時計の文字盤がこんなにはっきりみえるのだろうか。こたえは簡単。午前三時なのではなく、午前六時半であった。わたしの時計はとまっている。午前三時で突然とまった。

きのうの温度計といい、きょうの時計といい、どうしたというのだろうか。この大地、この自然、この暮らし、あるいはこの風土なるものが、計測されることをこばんでいるかのようである。温度計のことは、わたしの設置のしかたがわるかったせいだろう。時計については、電池切れかもしれない。いずれにせよ、偶然のできごと。しかし、偶然が連続するので、わたしには不思議だった。このささやかな計器たちは、きっとワープにたえられなかったんだと思う。

きょうは朝から南東の風がふきつけている。ドアの正面をたたく風。彼らのいう「前」すなわち南東からの風である。この方向からの風はめずらしい。ドアを出るたびに、ドアはバタリと大きな音をたてて、ゲルにたたきつけられる。一般に、モンゴルのゲルが北西を背にして設置されるのは北西風をさけ

表1：所有頭数

	ウシ	ウマ	ヒツジ	ヤギ	ラクダ
本家	30	15	100	70	2
分家	21	18	156	16	12

表2：分家のヒツジ、ヤギ群

	種オス	去勢オス	メス(うち2歳メス)	計
ヒツジ	2	53	127(44)	182
ヤギ	0	19	30(8)	49

家畜頭数と羊群構成

るためだといわれている。きょうのように北西以外の方向から風がふきつけるとき、そうした解釈を実感することができる。ドアが木製でなくフェルト製だった時代を想像すれば、北西風が卓越するこの大地で、北西を背にして家を建てるのはもっとも合理的な選択である、と納得させられた。

腕時計はつかえなくなったが、一家にはたくさんの時計があった。いずれも、結婚などの祝いの品。本家の大きなゲルの場合、正面奥座「ホイモル」の位置に壁時計がある。

午前八時、ヒツジの群れが放牧に出発。ヒツジの群れにはヤギもふくまれている。いつもウシは宿営地の周辺をうろつく。乗馬用のウマ数頭がいる。これらのほかに、遠くにもウマの群れがいるという。ラクダもいるらしい。ここには、モンゴルの「五種の家畜」とよばれる基本的な種類がすべてそろっている。

ダンゼン父の解説によれば、ヒツジがざっと三百頭、くわえてヤギ百頭、ウシは四十頭、ウマも四十頭、ラクダは二十頭ということであった。本

家と分家の所有をあわせたうえで、なおかつやや水増し気味の表現。正確な頭数を知っているのは、むしろ息子たちであろう。息子たちは、やがて自然に正確な数を教えてくれるにちがいない。あえて、いま聞きただす必要もあるまい。

ウマやラクダは、交通手段として利用される。夏はウマにのり、冬はラクダにのる。通常、群れは宿営地から遠いところで放牧されている。たいてい行政単位ガチャの境界付近で放牧されている。その群れのなかから、利用したいものを、利用するときに、つかまえてつれてくる。また通常、一戸ないし宿営地単位で管理しない。周辺の牧戸があつまって、群れを編成する。ウマやラクダは、毛やたてがみ、さらに乳も利用できる。ここでは、夏期にウマを搾乳して馬乳酒をつくるが、ラクダは搾乳しない。

ヒツジ・ヤギは、毛、肉、毛皮を利用する。乳はもはや利用しない。ウシの数がふえている今日、ヒツジ・ヤギを搾乳する牧戸はもう少なくなってしまった。群れは、毎夜、宿営地の付近「ホト」とよばれるあたりで休眠する。丸い石垣と四角い石垣のあいだなどでやすむ。大きな家畜の囲いをもっているのに、通常そこに群れが収容されることはない。

囲いにいれなくても逃げたりはしない。群れているかぎり大丈夫。個体を囲わずにとどめるのはむずかしいが、群れという集団なら比較的容易に自律性をもってまとまっている。それが、五種の家畜の持ち味。すなわち群居性有蹄類とよばれる動物の特性である。

毎日、戸外のヒツジの寝床から、放牧地へと出ては帰る、繰り返し。これが日帰り放牧。放牧の道中はどちらかといえば線状のルートであり、放牧の到着地は面状のエリアである。とはいうものの、とくに両者のちがいはない。後者をとりあえず放牧地とみなしておくが、とくに自然に手がくわえられて改良された草地があるわけではない。道中も到着地も、いわゆる自然草地である。わずかに、到着地には、放牧地としての利点をみいだすことができる。日当りのよい斜面であったり、風当りをさける窪地であ



石垣の向こうは囲い込み草地

ったり。そんな程度の利点の有無があるだけで、すべては自然草地なのである。

たいてい牧夫が群れについて放牧するものだが、モンゴルでは少し事情がことなる。ウマにのっているからである。騎乗して放牧に出発したあと、群れがその日の放牧地に到着したのち、とくにもに問題がなければ、牧民は家にもどることができる。さぼってもかまわない。しかるべき時間に騎乗して、ふたたび放牧地へおもむけばよい。たとえば、群れの一部がみあたらないといった重大な問題が発生していても、ウマの機動力がものをいう。帰営時も、ウマをはしらせ、群れの移動する方向を宿営地ホトのほうにむけておくだけで、群れは自然にホトに帰営する。要するに、放牧は簡単におこなわれる。

さらに、ウシの放牧はもっと簡単。適当な方向へ追いやっておくだけといってもよい。ウシについては、「スレグ・タビフグイ」すなわち群れを設定しないという。このことばには、複数の牧戸が協力することなく、各戸で管理するという側面

と、ほとんど放置されているという側面とが表現されている。放置とはいうものの、搾乳とかかわりのある母ウシと子ウシだけは手元で管理されている。母ウシと子ウシは宿営地付近で放牧される。それ以外のウシはほとんど放置状態なのである。それらはまとめて「ソバイ」すなわち不妊とよばれる。喉がかわく暑い日には井戸に、寒風ふきすさぶ日には石垣の壁に、ウシたちは自分の判断でやってくる。水くみなどに必要な場合にだけ、そのつど騎乗して去勢ウシをつかまえにいく。

これらの五種の家畜のうち、ヒツジとヤギについてのみ、バースコントロールをおこなう。つまり出産シーズンを人為的に設定する。種オスを選択してその他のオスを去勢するというコントロールは、すべての家畜について実施されるが、出産シーズンを管理するのはヒツジとヤギだけである。ヒツジとヤギの妊娠期間はおよそ六ヶ月。このため、自然な交尾に依存していると一年に二度出産するものもいて、体力を消耗してしまう。また、冬に生まれた子ヒツジは越冬できないこともある。そしてなによりも、子ヒツジ・子ヤギの成育度がまちまちであると管理しにくい。それゆえに、出産が年に一度一定の時期に集中するように交尾を管理する。自然な出産「季」を人工的な出産「期」に固定するのである。

具体的な方法としては、種オスをメスのいる群れから分離したり、種オスにふんどし布をあてがう。交尾の時期を管理する結果、出産はおおよそ一ヶ月のあいだに集中する。シリンゴル草原では、ほぼ三月下旬にはじまり、四月下旬におわる。そして、このような春が牧繁期となる。

おまけに、春はいちばん厳しい季節である。冬の大陸性寒気団と夏の大陸性暖気団がいれかわり、天候が不順になりやすい。風のつよい日々がつづき、吹雪にもなる。食糧事情もまた厳しい。本格的な搾乳シーズンはまだはじまらず、晩秋に屠殺して準備した越冬用の肉はもうそこをつきはじめる。

シリンゴル草原では、春の出産期はほぼ一定しているが、年ごとの差も大きい。来春はどうやら寒くなりそうだと予測すれば、出産期を遅らせる目的で交尾期を遅らせる。暖春とよめば、交尾期を早める。

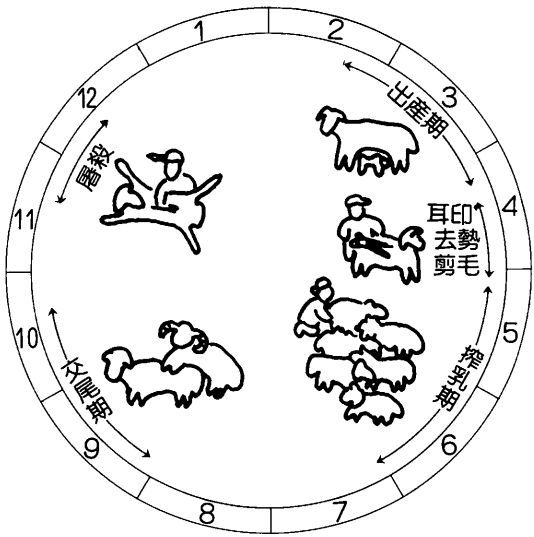


図5　ヒツジをめぐる作業暦

年変動が大きいという気候的特徴に対して柔軟に対処するため、交尾期ひいては出産期がかなりフレキシブルに設定されている。

ダンゼン家での出産シーズンは、清明節にはじまる、という。ことしはそのようにコントロールされた。清明節といえば、旧暦三月十八日。太陽暦では四月四日である。清明節までまだあと十六日もある。遅い！　わたしはあらかじめ当地の出産期をしらべて三月下旬と想定していた。三月中旬には出産シーズンが開始するとよんでいたわたしにとって、清明節とは遅すぎる。

「毎年そうですか」

とたずねると、ダンゼン父は説明する。

「いつもよりすこし遅い。遅らせつつある。八五年、八六年とゾドがあってから、清明節のころにといいつつ、清明節をすぎてからと遅らせつつある」

近年つづいたさむい春が、かれらの決定に大きく左右したようである。シーズンが清明節にはじまれば、シーズン全体は、清明節のころではなく、

清明節をすぎてからになる。

出産シーズンはまだ到来していないものの、出産したものはいた。はやくも母になったヒツジたちは、群れに他人の家畜がまじっていることを意味していた。本家と分家の所有するヒツジ・ヤギは、ひとつの群れにまとめられている。雇用牧人ソョルトがその放牧にあたる。雇用といっても無給。やがてかれが結婚して独立するとき、すべての支度を雇い主が世話することになっている。この群れに、さらに別の人の家畜がまじっていることが、わかってきた。

三日前のことである。当地にやってきた当日。石垣のなかに生後三日めの二匹の子ヒツジがいた。それらの母たちは、群れのなかにあって放牧にでていた。群れがもどってくるのをまって、母と子を対面させてやらなければならない。まだ草を食べることのできない子ヒツジには、母乳が必要だから。日暮れとともに、ヒツジの群れがみえてきたとき、モージ母は、子ヒツジたちを両わきにかかえて石垣を出た。モージは大きな声で群れに向かってさけぶ。

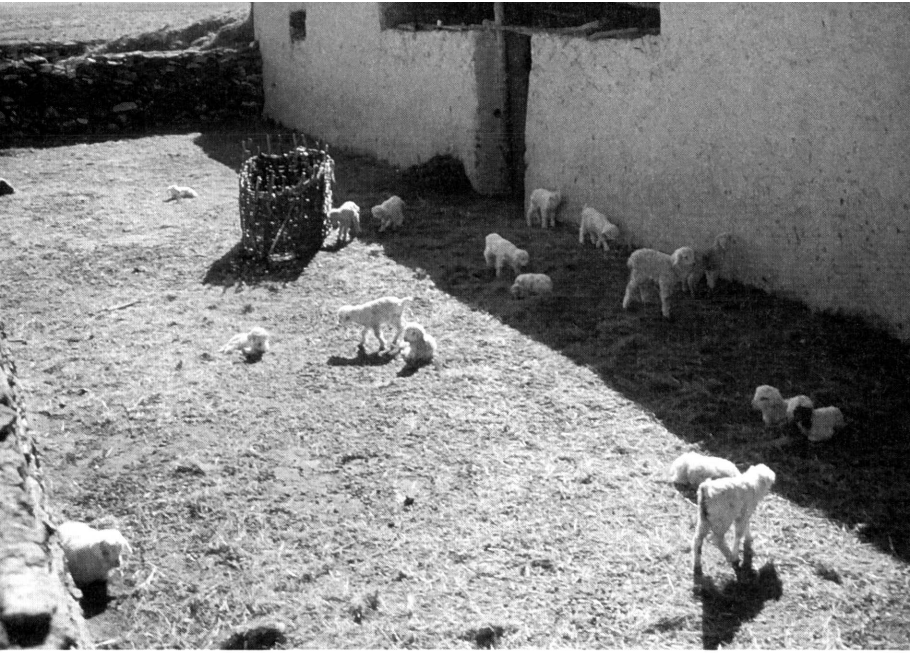
「トゥルトゥルトゥル……」

子ヒツジをかかえながら、群れにむかってさけぶ。すると、群れから二頭のヒツジがとびだしてきた。全体がまっ白なのと、頭から胸のあたりまで茶色なのと。ずっと遠くからなのに走りよってくる。それはまぎれもなく、石垣にのこされていた子ヒツジたちの母たちだった。

次の日も、その次の日も、そしてきょうも、モージはもう、

「トゥルトゥルトゥル……」

とさけばない。さけばずとも、母ヒツジたちは群れに先んじて石垣の周辺にもどってきたからである。母ヒツジたちは、石垣のなかにのこされた子ヒツジのことをわすれないのであった。



出産シーズン開始後、石垣なかの子ヒツジたち

毎夕放牧からもどってきた母ヒツジたちは石垣のなかに誘導される。石垣のなかで子ヒツジに授乳し、そこで子とともに夜をあかして、翌朝また放牧にでる。

一般にモンゴルでは、子ヒツジは母ヒツジとともに母子群として放牧し、他の去勢ヒツジの群れと別にする。子ヒツジは母ヒツジから分離されていない。ただし、搾乳期になると、一日中子と母を一緒にしていると乳をすべて飲まれてしまうので、一時的に母と子を分離することはある。もはや搾乳がめずらしくなった今日では、たとえ子が大きくなって搾乳可能になっても、母と子はつねに一緒にいて、放牧にも一緒にでかける。

したがって、ここで子ヒツジが石垣にのこされていて、母ヒツジだけが放牧にでるというのは、むしろ特殊な状況であった。なぜ、そんな状況におちいったのか。

その母ヒツジは、本家のヒツジでもなく、分家のでもない。羊人ソヨルトの実家のもの。彼はこ

の雇用先の群れに、わずかな所有ヒツジを統合していた。秋の交尾期をおえてから統合した。交尾はダンゼン家よりも早くすませた。だから、早く出産期をむかえる。本格的な群れ全体の出産期よりもかなり先行する。子ヒツジは、群れ全体の移動速度についていけない。かといって、母と子をまとめて放牧するほどの数にもならない。それで、ソヨルトの子ヒツジは石垣のなかにのこされて、母ヒツジは群れとともに放牧にでていた、という次第。

モージ母がいう。

「ほかにも、ひとのヒツジがいる。エルデニチメグのだ。おまえは、エルデニチメグに会うだろう。彼女は、出産作業をするためにやってくる」

老夫婦の末娘で養女に出したエルデニチメグのヒツジ・ヤギも統合されているらしい。彼女のヒツジもまた、本家よりも早い出産期をむかえるらしい。わたしにとっては、たいへんありがたいことである。出産シーズンを観察したくてやってきたのだから。

それにしても、清明節は二週間以上も先のこと。許可された二週間では、本格的な出産期をかいまみることさえできない。「清明節をすぎてから」ときいて、滞在許可の延長をねがいでる必要がでてきた。